



第 015 号 2020 年 8 月 1 日 稲石美知子

自粛中に思ったこと

書を教えている私の教室には、「おむすび会工房」というもう一つの顔があります。町会の仲間のおしゃべり、兼、趣味の作業場に提供しています。金曜の夜は毎回 10 人前後が集まり 2 時間程の楽しいひと時を過ごしていました。

中国で新型コロナウイルスが流行していると知ったときから、中国からの観光客で溢れていた浅草では、既に蔓延しているのではないかと危惧していました。近くの病院での院内感染が連日報道されると、その病院に通っていた人もいることから、工房でのクラスターを心配し、3 月下旬から集まりを中止しました。私も書道教室の 4 月休止を決めました。緊急事態宣言が出され、いろいろ関わっていた会もすべて中止となり一気に何も無い状態です。これを契機に、物で溢れかえる稽古場の片付けに励むことにしました。収納棚の中、部屋の隅に積んであった箱の中、全部床に広げ、入れ直し、処分もし、あつという間の 1ヶ月でした。

緊急事態宣言の延長で、書道教室も休止を 5 月まで伸ばすことにしました。稽古事は一度離れると続かなくなることもあります。そこで 5 月は清々とした稽古場で、マスク着用、入室時のアルコール消毒の条件で、自宅で書いてきたものを 2、3 分添削するサービスを始めました。6 月からは、同様の条件で滞在時間は 1 時間以内ということで稽古を開始しました。おむすび会も同様にして、飲食無しで 6 月から集まることにしました。

今回のコロナ禍で、今後の生き方も考えさせられました。片付いていることは精神的にとっても良いことに改めて思い知らされたこと、おむすび会の仲間との無駄話や人々との交流がどんなにか楽しく、生き生きとした生活であったかということです。まだまだ予断は許されませんが、幸い身近なところでの感染の話は聞きません。予防に気をつけながら工夫して、楽しみも続けていこうと思っています。

稲石美知子 (書道家・書道塾主宰)